

表裏を貫く — 触察鑑賞の文化史的意義

国立民族学博物館人類基礎理論研究部 教授 広瀬 浩二郎



角栄と瞽女

今、田中角栄に関する本を読んでいる。なぜ、田中角栄なのか。彼が総理大臣在任中の1973年、二人の瞽女、伊平タケと杉本キクエが黄綬褒章を受章している。これは単なる偶然かもしれないが、角栄と瞽女の人生を対比してみると、文字どおり表・裏の両面から日本の近代をとらえ直すことができるのではなからうか。

田中角栄は戦後日本の強さと弱さを体現する政治家である。新潟（裏日本）出身の彼は、東京（表日本）に出て総理大臣の地位まで上り詰める。彼が掲げる「日本列島改造論」を一言で要約すれば、日本列島全体を表日本化する試みといえる。太平洋沿岸に集中している工業地帯を全国の拠点都市に分散し、人口30万～40万人の中核都市を各地に育成する。そして、それらの都市を新幹線と高速道路で結ぶ。列島改造論の背後には、新潟の豪雪地帯に生まれ育った角栄の宿願があるのは確かだろう。東京に行くためには上越国境の「山」を越えなければならない。「金と票のコングロマリット（複合企業）」と称される角栄の後援会「越山会」は、「山」と対峙し、格差と僻地をなくすために奮闘した民衆の共同体でもあった。

角栄は金権政治の権化として厳しく批判されている。彼の政治手法がさまざまな問題点、前近代的な体質を持っていたのは間違いない。一方で、自己の派閥の所属議員数を増やしていく「金＝数＝力」という彼の思想は単純明快である。角栄に対する評価は、その死から30年を経過した現在でも毀誉褒貶相半ばしているが、彼は良きにつけ悪きにつけ「目に見える」実利を追求し続けた政治家だったといえよう。

では、瞽女はどうか。瞽女とは三味線を抱えて各地を旅した盲目の女性芸人である。瞽女唄は音と声による口承文芸として、民衆に支持されてきた。江戸時代には全国各地で活躍していた瞽女は、近代以降は新潟に拠点を残すのみとなる。豪雪に耐える新潟の人々の相互扶助の精神が瞽女を支えてきた。浪曲好きの角栄も、幼いころ、生家で瞽女唄を聴く機会があったといわれている。裏にこだわり、裏にとどまる。そんな生き方に徹したのが瞽女だった。

水上勉の『はなれ瞽女おりん』の末尾で、憲兵の尋問に対し、おりんは次のように述べている（引用は原文のまま）。「……世の中に、いったい、どげなさい目があるのかわかりませぬ。ここからは道じゃ、ここからは川じゃ、ここからは朝じゃ、ここからは昼じゃ、ここからは夜じゃといわれても、時間も年も、さかい目をみたことはござえませぬ。おらは目くらでござえます。人さまの顔も、手も足もみたことはござえませぬ。見ねえものを見たというわけにゆきませぬ」「……おらがみたものは、平太郎さまの心でござえます」。

平太郎はおりんの保護者で下駄職人、じつはシベリア出兵を拒否した脱走兵だった。『はなれ瞽女おりん』が刊行されたのは、田中角栄総理大臣の退陣後、1975年である。瞽女という目が見えない芸能者を取り上げることで、「角栄的なもの」が孕む危うさ、欺瞞を鋭く指摘した水上の「裏日本からの視座」はきわめて興味深い。瞽女唄には、瞽女たちが旅の中で経験した喜びと悲しみ、心象風景が凝縮されている。瞽女と民衆の心をつなぎ、目が見えない連帯を育ててきたのが瞽女唄なのである。日本人が「角栄的なもの＝物質」の豊かさを追い求め、「瞽女的なもの＝精神」の大切さを忘却してしまった



1973年7月、地元・新潟で公演する伊平タケ（柏崎市立博物館提供）

課程が、いわゆる高度経済成長なのではないだろうか。

伊平タケは1973年、東京でリサイタル「しかたなしの極楽」を開き、人気を集める。瞽女が旅に出なくなり、伝承者が激減する1960年代後半に、ようやく無形文化財として瞽女唄が注目されるようになったのは皮肉である。伊平が黄綬褒章を受けるのも80歳代、最晩年だった。

伊平によると、「極楽とは、ごく楽に生きること」である。この世で、目が見えぬ現実「しかたない」。でも、その「しかたない」環境の下、自分は瞽女となり、多くの人に出会い、ごく楽に生きてきた。おりんの台詞を借りるなら、たくさんの人の「目に見えない心を見てきた」伊平の感慨が、「しかたなしの極楽」という語に込められているような気がする。

立花隆が喝破するように、田中角栄は独自の金脈と人脈を駆使して、自身が地上の極楽に住むことをめざした。いうまでもなく、この極楽は「目に見える」華やかさに彩られている。極楽を地元・新潟にももたらそうとする角栄の並々ならぬ努力は、利益誘導、欲望至上主義という言葉のみでは片付けられない。一面において、田中角栄は、必然的に「裏」を生み出してしまう日本の近代化の矛盾を克服しようとした「決断と実行」の人だったといえる。

ノンストップの上り列車のような角栄の一生は、病気による政界引退という形であっけなく終止符が打たれる。2005年には「最後の瞽女」小林ハルが老人ホームにて永眠する。角栄も瞽女もなくなった21世紀の日本において、今

もなお社会の各方面で裏と表の微妙な関係が見え隠れしている。角栄の栄光と挫折を振り返ると、「裏」を「表」化する発想ではなく、「裏」を貫くことで「表」のあり方を問い直す視点の有効性が明らかとなる。裏と表の境目をなくす「目が見えない」瞽女たちの視線が、政治的・経済的な混迷の続く今日の日本に必要なのではなからうか。

触察鑑賞の可能性

「瞽女的なもの」をどうやって再創造、発信していけるのか。これは「瞽女なき時代を生きる」視覚障害者である僕にとって大きな課題といえる。やや唐突だが、裏と表の関係を体感する手がかりとなるのが、美術作品の触察鑑賞なのではないかと僕は考えている。僕はこれまで、多様な作品を対象とする触察ワークショップを企画・実施してきた。ワークショップの事例を含め、最近の僕の「さわる展示」の実践については、拙著『ユニバーサル・ミュージアムへのいざない』（三元社、2023）で詳述しているので、ここでは省略する。

僕が「さわる＝目に見えない世界を探る」ためのキーワードとして重視するのが「入る」「流れる」「求める」の三つである。2023年7月に大分県立美術館、および遊歩公園で開かれた「彫刻をさわる時間」は、イベント参加者とともに、この三つのキーワードを確認する貴重



おおいた障がい者芸術文化支援センター主催「彫刻をさわる時間」の会場風景（大分県立美術館「朝倉文夫生誕140周年記念 猫と巡る140年、そして現在」展にて）

な機会となった。本イベントでは30名ほどの参加者が3グループに分かれ、朝倉文夫の彫刻作品にじっくり触れて鑑賞した。触察は「つつる／ざらざら」「冷たい／温かい」など、表面的な理解から徐々に内面の探究へと進む。「目に見えない」作品の「裏」にどれだけ近づくことができるのかが触察鑑賞のポイントである。三つのキーワードに即して、朝倉作品の魅力を簡単にまとめてみたい。

①入：さわると見るの最大の違いは、距離の有無だろう。見る場合、鑑賞者と作品の間には物理的な距離がある。他方、手でさわれば、作品と人を隔てる距離はなくなる。手を介して、者と物が融合・一体化するともいえる。朝倉は猫を題材とする作品を多数制作している。実際にたくさんの猫を飼ひ、日々ペットに触れながら作品制作に取り組んだという。かわいい猫の彫刻を撫でて(愛玩して)いると、いつの間にか自分が猫の仲間に入り込んだ気分になる。猫の愛らしさ、生命力は視覚的にも十分味わえるが、猫の中に入り込む感覚は触察でしか得られないだろう。「猫に会い、猫に入れば、猫まみれ」。

②流：朝倉は多くの裸婦像を残している。等身大の裸婦像に抱きつくように、全身で触察する。彫刻作品に宿る不可視のエネルギー、命の躍動を実感できるのが裸

婦像の触察だろう。両手のひらをダイナミックに上下・左右・前後に動かす。水の流れのように時に速く、時にゆっくり身体を移動させる。作品そのものは動かないが、触察鑑賞に慣れてくると、裸婦といっしょにダンスしているような錯覚にとらわれる。いや、それは錯覚ではなく、作品(作家)の内面から湧き出る「目に見えない心」を見る実体験なのである。「裸婦像が、流れに乗って、躍り出す」。

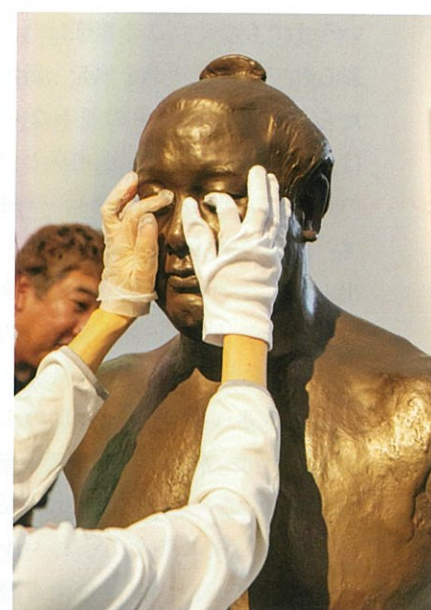
③求：朝倉は著名人の胸像も手がけている。今回のイベントでは市川団十郎(九代目)、双葉山の胸像を触察した。一般に、胸像では胸から下の部分、手などはつくられない。しかし、双葉山の逞しい胸部に触れてみると、ないはずの手や足をリアルに想像することができる。ないものがあるように感じさせるのが、彫刻家の力量なのだろう。「木鶏(泰然自若とした最強の闘鶏)」のエピソードが示すように、双葉山は相撲道に精進し、最後には戦わずして勝つ境地に至る。少年期の事故で右目の視力を失った双葉山には、見えないはずの敵の姿が見えていた。この能力は瞽女にも通じる。胸像の触察は動ではなく、静である。モデルの事績に思いを馳せ、顔面や肩に優しく手を置く。彫刻の作者、モデル、鑑賞者の求道心が重なり響き合う。触察鑑賞は新たな道(未知)を



入る：猫の彫刻を触察する



流れる：裸婦像を触察する



求める：双葉山の胸像を触察する

希求する行為なのである。「求めれば、見えぬが見える、双葉山」。

さて、ここまで記述してきたことからわかるように、触察鑑賞とは単なる障害者対応、視覚による鑑賞の代替手段ではない。あえて言うなら、古今東西、ミュージアムにおける「見る」鑑賞は「表」だった。その「表」に対して、「裏」と位置付けられる触察鑑賞を今後どれだけ普及・定着させていけるのか。かつて田中角栄は「表」の価値観で「裏」を統合し、日本列島全体を平準化することが極楽なのだと信じて、懸命に「山」に挑んだ。角栄が「山」を越える原動力となったのは、近代化のプロセスで「裏」に追いやられた民衆たちの怨念だった。角栄の功罪をしっかりと検証することによって、「裏=さわると」「表=見る」という二項対立を乗り越える「ミュージアム改造論」を構築できるに違いない。

瞽女は、角栄とは異なる方法で「表」と「裏」の境目がなくことを証明した。新幹線や高速道路を使わず、自分の足で一歩ずつ地を這うように進む瞽女たちの「行き方=生き方」は、手のひらが捕捉する点の情報を線、面へと広げていく触察鑑賞に似ている。「裏=目に見えない

瞽女」と「表=目に見える民衆」の協働・触れ合いによって鍛えられた瞽女唄は、音と声の迫力で僕たちの心を揺り動かす。

スマホの汎用化が象徴するように、現代社会は視覚情報に支配されている。「見える化」は昨今、企業等で頻繁に用いられる言葉だが、世の中には「見える化」できないものがたくさんある。何でも「見える化」しようとする風潮は、「角栄的なもの」が日本社会に生き続けている証拠ともいえる。「見える化」できないものの代表が瞽女唄である。瞽女唄に耳を傾ければ、僕たちは「裏=目に見えない世界」の存在を再認識・再確認することができる。

触察鑑賞が、視覚優位のミュージアムのあり方を変えていく。瞽女がいなくなった現在、「瞽女的なるもの」を新たに生み出す可能性を秘めているのがミュージアムである。新幹線や高速道路ではなく、触察鑑賞によって「裏」と「表」がつながる時、僕たちは「角栄的なもの」を真に超克できるだろう。そう、触察の手応えは僕たちの期待を「裏・切らない」!

(ひろせ・こうじろう)



おおいた障がい者芸術文化支援センター主催「彫刻をさわる時間」。障害の有無に関係なく、老若男女が朝倉作品の触察鑑賞を楽しんだ。美術館の展示場内では手袋着用が原則とされたが、遊歩公園では心地よい風とともに、参加者それぞれが素手で野外彫刻と対話した。